（十四日夕刊）

磐城新聞

休刊　大祭第一第三日曜
定價　壹枚二錢、壹ヶ月五十錢、郵稅十錢
廣告料（雜報欄行五十錢　塲所指定二十錢增）
發行兼編輯印刷人　蓮沼龍輔
發行所　福島縣平町田町拾六　磐城新聞社　電話五六四番

くすりの御用は
五丁目角の
山野邊藥店へ

哀悼辭

昭和二年十月九日勳四等白井遠平翁溘焉として東京本郷上富士前町の邸に逝く高齢まさに八十有二歳所謂人生功成り名遂げて矍しやく壯剛その天壽を完ふしたる翁の如き蓋し世上極めて稀なりと云ふべし今や忽焉として郷土の誇るべき偉人を喪ふ、吾人郷黨後進たるもの痛惜哀悼の情安んぞ堪へん。憶ふに翁は平藩の儒者神林復所門下の高材として紅顏十五歳夙くも名主代勤に選まれて以來その壯年時に於ては縣會成立後殆ど毎期の縣會議員として將又郡宰として縱橫の經綸を以て地方福祉の增進に努め其一度桂冠して故山に歸るや明治廿三年衆望を一身に集めて初期の衆議院議員に當選し地方開發に寧日なく所謂黎明時代の磐城地方は一に翁の手によりて常にその新生面を打開せらる翁は更に地方の炭田を開發すべく明治二十六年五月澁澤榮一、淺野總一郎氏等と謀り磐城炭礦株式會社を創立して常磐線鐵道の敷設を促進し其輸送を圓滑敏活ならしめ更に廿八年松方正義、川崎八右衛門氏等と入山採炭株式會社を創立其の取締役社長に就任し廿九年更に地方最初の金融機關たる株式會社磐城銀行を創立して自ら其の頭取となり卅六年北漸して好間炭礦株式會社を創設する等、現今磐城炭田に於て一ヶ年數百萬噸の出炭を見つゝあるの殷盛は之れを悉く翁の功績に歸せざるべからず、大正三四年の功により勳四等瑞寶章を授けられ更に從五位に陞叙さる又故なしとせざる也。

秋天漸く蕭殺、偉人逝いて磐城の山河寂として凄凉たり。聊因絮果之れを如何ともすべからずと雖も吾人郷黨後進たるもの仰天俯地之の悲みを奈何せん。玆に誠悃の限りをいたしてその長逝を悼む

昭和二年十月十五日

磐城新聞社

偉人遠平翁逝く

――壯年時の追憶――

高が小川村は、川原組の庄屋の小倅に生れ、良しや人知れず、草間に爪を磨いだにもせよ、氏素性が源平藤橘の種でもない。、明治二十三年に、正八位の郡長と云ふ渺たる一官歷の人が、

かだ、そして秋毫の微も苟くせず、勤儉己れを持して緩急、用意に專念するあたり、古今獨歩の慨がある。幼にして穎悟若冠國事に奔走し、德望高く、才幹衆を拔き、博覽强記、斗宵

より一躍して會津百萬石に封ぜられしにも似て、豪かつかに相違ない、ソレ嘘だら遣つて見ろ。磐城の生んだ傑物だ、郷土の誇りだと云ふことは、必しも溢美の言ではあるまい。二つ箭山は餘り高い山でもないに、玉は崑崗に出づ、千字文の文句も此れに當て篏めることが出來る樣だ。翁の幼かりし時の友垣としては、佐藤甚右衛門君や、柏原左源太君や、水田直次郎君や、又は高木友枝と云ふ人や、大平左司馬氏や、其他郡內多士磅礴せしも、殘るは赤坂龜次郎君一人位現存して居らるゝ樣です、此方々は翁の信義に淳きを稱ねて、其高風を敬慕して居られたものです筆者なども翁の訓戒を受けた一人ですが、餘り口數を利くものでない、利害に大關係を有するものでなければ、爭ふものでないと云はれて、今も尚ほ昨の如く感謝して居ります。翁は居常端正であつて、一言と雖も苟もせず、疾言遽色せざるを以て、其行婦女子の如き姿あり、而かも勇氣潑溂として果斷決行に富む、而かも其勇氣たる、匹夫辱しめらる、劍を按じて而して戰ふと云ふが如きものでない。必ずや其戰ふには戰ふべき大なる理由が莫ければならないと云ふ信條があつた、世人も記臆せらるゝであらう、明治二十四五年の交、例の選擧干渉の血戰として政界を彩るものに、西に松田あり、東に河野あり、翁は寧所を出でて此大立者に捨身のウツチヤリを試みたるの一事は、生きたる大膽不敵の證據ではあるまいか。近代に於ける、福島縣の政界の橫綱は何と云つても翁と河野さんであらう。此人は枯れ松葉を燒いた樣な一時の燦爛たる線光花火式で、翁は全く之に反し、一步一步と地固めを爲す政治家だが、靈犀相許せし點もあつて、林有造と、佐々友房と四人で、天下取りの相談を遣らかし政界の渦を捲起したものだ西郷さんや、品川さんを引張り出して國民協會を組織した當時の如き、渡邊洪基、曾禰荒助氏等は、ほんの傀儡に、樂屋は翁と佐々の振付けだつた、それで翁は牧朴眞氏幹事に擧げられ、會一切の切盛りを爲したものだ。品川さんの如き、翁を磐城西郷と呼んで、本物の從道侯に笑はれた事もあつた、一体翁は、漢の三傑中張良や蕭何を乘ねた人で、原さん杯は、能く翁の遣り口を飲込み、淸浦子と寺內さんを結び付ける段取なあのニヤリ〱と右の手を頬に當てがひ見惚れて、之に應じた話も是も、面白い一幕芝居だ、されば翁を實業家一點張で終始せしむることは、政友會の人物經濟上損失だとあつて、自ら勸めて好間を古河に緣付けたものだ。是で禪味を加へ。理智を去り捨鉢に物を遣らば恐らくは大臣宰相に成つたであらう。借茲に一のエピソードを御紹介せば小川八ヶ村の地芝居の一幕だ、藝題は忠臣講釋の七ツ目で、父はたりえに扮し、嫡男博之さんの岳翁草野政醇氏が重太郎、草野高藏氏に喜內を振り充て、却々の上出來で、此分では、寺小屋を出そうかと、翁は矢張おやまで、千代を勤めて大當り、是では寧ろ、酒を作つたり百姓をやるより、文藝趣味に浸りつゝ地廻り役者にならうかと、幾度か思ひ惱みたることもありしとか、其時たりねが例の「お前ばかりが出世して子はかつえてもかまはずか」のさはりなどは、實に手に入つたものだそうです。翁が今日の位地を作り上げるには、[illegible]見は飢に叫ぶと云ふ悲慘こそなけれ、壯年福島事件で國事犯に問はれ、囹圄に呻吟し、具さに辛酸を甘め[illegible]哀樂を現はさぬ樣な風格が出來た譯です。政治家とな[illegible]

異例の御沙汰

遺族の人々感泣

白井遠平翁の病俄かに革まり危篤の報天聽に達するや特旨を以て左の如き御沙汰があつた

故正八位勳四等　白井遠平

特旨ヲ以テ位五級ヲ進陞セラル

昭和二年十月十日

宮內省

正八位勳四等　白井遠平

叙從五位

昭和二年十月九日

宮內大臣　一木喜德郎

因に正八位より從五位に一躍五級を進陞された人は曾に山形縣の農學士代議士たりし齋藤字一郎氏と今回白井遠平翁のほか前例なく此の破格の有難き天恩に對し嗣子博之氏以下遺族親戚一同は只々感泣してゐる

たとひ叡慮とは申し乍ら、一躍從五位、追陞せられたと云ふ事歷は、何と云つても天下異數の取扱ひだ、從五位の位勳は、子爵の御殿樣の通り相場で、此殿上人は、概ね先祖代々、金鍬形の賜物だ。

翁が八十二歳の道程には、一言にして百世の師となり訓を後世に傳ふべきものがありませう斯人にして、元龜天正の亂世に、生れたならば、惜されだけの功績を遺したであらう、苦勞人としての翁は、家康らしき所もある、それに秀吉の機智を兼ねて居る、外交、腕があつて、計數にも明るの企て及ばざる所あり抔と月並の傳記では、紙背に徹せざる無眼流の評論だ、翁の月旦はこんな無味乾燥の申し分では、あたらない代議士となるにも成るだけの經綸抱負があり、銀行頭取と納まるには、納まるだけの値打ちがあります炭礦の社長としてからが、郡長上りの此翁が、東京一流の松方さんの肝煎で森岡元郵船社長と川崎さんの樣な日本の大富豪と肩を駢べて其重役となつたには、夫れ相當、理由と關係がなくてはならぬが、兎に角異數の拔擢だ、昔しは伊勢長島の城主、蒲生氏郷が、拾貳萬石[illegible]

白井遠平翁傳記（一）

――私の秘藏書中から――

小野務平

△出生

白井遠平翁は弘化三年四月二十九日を以て下野國芳賀郡眞岡町に生る姓は素と佐藤氏後ち父幸助氏が白井家を承繼するに至り白井氏を冒す

△父　母

父佐藤幸助氏は世々三春藩の城主秋田信濃守の所領磐城國田村郡菅谷村の庄屋たり性仁俠にして慈悲深く常に强を挫き弱を扶け公平無私以て村民を恩撫慈愛せしを以て村民は父母の如く敬慕せり、天保七年天下大い[illegible]倉を開き恰く村內の窮民を賑恤するや八皆その非常な[illegible]

[illegible]下野國芳賀郡眞岡町に往き暫らく此地に寄寓する[illegible]を冒せり

△翁の誕生

幸助氏は郷里を出で先づ[illegible]

本傳記は白井翁が幼少時代より青年に入り、官公職時代の功業より更に進むで縣會議員、代議士より實業界に入つての偉跡を記したものである

（續く）

翁が心血を注いだ

小名商港實現

來る十八日臨時會で愈々正式に決議

遠平翁が奔走努力の結果小名濱商港問題は遂に今日の運びに至らしめた事は別項諸名士の談話中に力說されてゐるばかりでなく殆んど衆知の事實であるが該問題は愈々來る十八日を以て內相官邸に於いて開催さるる臨時港灣調查會に重要港灣指定並に修築問題と共に附議される事に決定しかゝてゐる[illegible]

紺屋町から

靈位齊場へ

自動車乘組順

十五日午前九時遠平翁の靈位は平町紺屋町の自邸より南町の齊場に向ふ筈であるが自動車乘車順は左の如くである

△第一號自動車　白井博之　白井一郎　同夫人
△第二號自動車　[illegible]
△第三號自動車　[illegible]
△第四號自動車　[illegible]
△第五號自動車　[illegible]
△第六號自動車　[illegible]
△第七號自動車　草野家族
△第八號自動車　大森家族
△第九號自動車　外親族

健康第一
健康は胃腸から

ホシ胃腸藥

クスリはホシ
星製藥株式會社

安らかな永劫の眠りへ 大偉人の臨終

心なき蟲の聲に涙あり

蜿延卅數臺の儀裝自動車 靈柩本郷の邸を離る

台が磐城の生める偉大なる傑材、白井遠平翁の病革まり危篤の報天聽に達するや特旨を以て從五位に叙すべき破格の御沙汰があつた。翁の枕邊に在りし嗣子博之氏令孫一郎氏外近親の人々は勿論、今臨終　翁は此の限りなき**天恩の有**難さに感激の表情を現はし八十二才を一期に從容として安らかな永劫の眠りに就いたのである。時は去る九日午後四時東京本郷上富士前町の邸は故かなる悲しみに包まれ庭面にすだく心なき虫の聲さへ限りなき哀愁を誘ふた急變の報門を出づるや內閣總理大臣田中義一男を初め天下の顯官巨頭や翁の遺德を慕ふ人の弔問客踵を次ぎ流石高貴階級の屋敷街たる上富士前町は時ならぬ混雜を

憂愁の幕に二日間は過ぎた、翁の靈柩を安置した本屋洋館南面せる二階卅疊の間は翁が生前座右とした「忠毅愿正」の掛額を下に五段に設けられた壇の最上に羽二重を以て掩はれた靈柩が置かれ其の上に翁の大形の引延し寫眞が物言はん許りの凜たる風格は不識の人をしてさへ生前を偲ぶに充分なものがある、各家より贈られた造花生花その他の供物は所狹きまでに飾られ沈痛な一偉觀を呈した、門を沿つて玄關入口の廣場は此處も花輪に埋まり自動車、俥の

折りしきる中に弔客應接のあはたゞしさは形容し得ざる混雜を續けて愈々十月十二日、その日は翁の肉体が永劫に此の邸を去る日である。喪主博之氏を初め令孫一郎氏、草野順平氏を初め近親並に高岡唯一郎、中野浩忠、草野磐氏以下の指揮により準備滯りなく午後三時十分前

儀裝自動車約卅數臺が白井邸門前に整列し靈柩は心篤き人々の手で靜かに自動車に移されるや正三時靈柩車を先頭に先づ

△第一號車　白井博之　白井一郎　白井三郎　並木十四郎　草野順平

△第二號車　大森鎭平　中澤啓子　菅波角之助　近藤利兵衞　鈴木章之

△第三號車　城十郎　遠藤隼見　藤掛十一郎　杉田武雄　白井十三郎

△第四號車　守安瀧三　草野欽一郎　白井くら　平澤金次郎　星野市藏

△第五號車　菅波ふみ子　平澤きよ子　鈴木きみ子　白井つや子　白井ます子

△第六號車　大森義一　中澤彥雄　鈴木一雄　菅波稱平

△第七號車　遠藤常子[illegible]伊藤たま子　並木まき　小堀とし子　杉田まさ子　中澤磯子

△第八號車　守安ふみ子　中澤らく子　菅波ふき子　菅波絹子　大森きぬ子

の各近親者が夫れ〳〵分乘しそれに引くつゞく三十數臺の自動車は蜿々列を作し赤門前より聖橋を經て上野を縫ひ日暮里町屋火葬場に向つたが靈柩自動車が正に門を離れんとする頃

低泣の聲そこ此處に起り力ない中秋の陽は雲に隱れてあすの天氣を氣遣はした

途中驛まで 出迎えの人

翁の遺骸を乘せた列車を途中まで出迎へた弔客の諸氏左の如し

△水戸驛　いはらき新聞社本多社長　伊東　宮田　大森　柴の各重役並に社員　東部電力常務丸山德三郎　竹內家一門　水戸市有志吉田恒太郎氏

△高萩驛・小名濱町民代表助役高木保　同町有志代表小野務平

△磯原驛　磐銀支店長一同外有志

△關本驛　市原睦郎氏外平潟、大津方面有志

△勿來驛　諸橋守次　鈴木堅勁　小川禪龍　明智淺吉外有志

△植田驛　安島重三郎　山崎與三郎　金成通　古川傳一　河西八十治　麻生川顯　青沼鋒太郎　諸氏外有志

△泉驛　福尾伊太郎　上野代收造　赤塚乘助氏外有志

△湯本驛　若松條助氏

△綴驛　磐城實銀頭取馬目太平氏外有志（以上）

急を聞いて馳せた 弔問の諸名士

九日より十三日まで 本郷へ陸續雲集

九日午後四時白井遠平翁急變を聞き本郷の邸へと、各地より參じた弔客は夥しき數に達したがその一部を揭ぐれば左の如し

（順序不同）田中義一　高橋是清　澁澤榮一　田子勝彌　濱田四郎　川崎八右工門　諸橋心一　淸水安雄　山崎喜登一　守安瀧造　同夫人　小野晉平　古川傳一　金成通　中野甲藏　井上茂作　中野浩忠　竹內權兵衞　阿部潔　鈴木辰三郎　星野庸治　栗原一郎　白井定義　麻生川顯　井戸川敬志　齋藤義一　村松範亮　同夫人　丸山慶治　いはらき新聞社　伊藤和雄　松本彌右工門　堀川貢　四條七十郎　高橋虎太　岡熊三　川崎友之介　內田政夫　淸水釘吉　吉野周太郎　澁谷政吉　石射文五郎　橋本萬右工門　明波夫人　佐野三五　八田宗吉　入浦信一　澁谷夫人　靑田綱三　山野邊義智　梅村誠　堀田五郎　鈴木英雄　水永星郎　江連六郎　大見川榮造　羽取精一　同夫人　島田重溫　藤島榮次郎　赤津誠內　鈴木七郎　齋藤信治　守安瀧三郎　同夫人　福島縣農工銀行課長一同　山衆司　杉田慶一郎　菅波龜吉　岩本鎔　杉浦甲子郎　石井秀吉　大岩秀行　納富準一　山崎康太郎　鈴木康造　土岐章　同夫人　江尻勝　堀內修　甲斐莊橘郷　長澤爲保　飯田彌五郎　宮澤浩　岡本忠純　鈴木松雄　久本春雄　近藤貞吉　中澤磐次郎　淺野義夫　同夫人　近藤貢　長島啓　和田年松　太田桂之助　千葉彥治　矢吹務重　篠崎昌雄　小松貢三　菅林伊勢吉　南大曹　後藤忠弘　高橋訓造　藤野久雄　安島重三郎　高岡唯一郎　西忠義　片岡理一　山田珠衛　西村四郎　仁井田益太郎　宮田光雄　原嘉道　田口忠造　長谷川熊雄　下坂藤太郎　天野春一　山崎龜吉　江川種太郎　阿部政右工門　荒木直躬　吉田清左工門　磯部尙　中澤要輔　三浦純一　吉田磯次郎　大久保立　西山敬一郎　中澤彥七　高橋寅太　矢吹省三　川角五郎　宮田三郎　淺野總一郎　橋本萬之助　川崎丈次郎　林止　中澤義一　本田武雄　大倉發身　河合鐵二　川崎肇

（四百餘名以下略）

本葬當日の 葬儀委員

分擔任務決定

十五日本葬當日の葬儀委員は左の如く決定し十日來齋場の準備その他に奔走して來たが分擔を示せば

（委員長）安島重三郎　（副）中野浩忠（顧問）山崎與三郎　高岡唯一郎　本多文雄　諸橋久太郎　木村清治　金成通（幹事）新田目善次郎　山崎吉平　伊藤淺之助　井上茂作　木田織江　鈴木辰三郎　永山德一　中野甲藏　小野晉平　古川傳一（式場建設係）宮田三朗　諸橋守次（主任）加納五郎　高木信太郎　新妻新八　柳下元吉　井上貞次郎　山崎庫太郎　柳內元藏　鈴木長三郎（受付係）主任　佐々木龍若　山岡卯之助　關內菊次郎　國井民藏　吉田鎭政　二口武義　麻生川顯　志賀又吉　山崎千朝　河西八十治　淺野英男　吉野禮恭　小野菊彌　牧田豐　伏見丈衛　石坂詮太郎　柏原幸次郎（案內係）郡外各地　鈴木堅助　明智淺吉　武出精一　平松武　千葉彥治　鷹崎貞衛　丸山慶治　蓮沼龍輔　山田磐麿　川崎文治（同郡內各地）高島三郎　松田榮橘　吉田滾吉　林子之吉　鈴木太郎　高野清一　渡邊爲三郎　柳下文藏　丹谷健三郎　山野邊八五郎　守谷松太郎　根本松太郎　箱崎丑藏（法要係）主任　青木榮太郎　山田忠太郎　草野正壽（支出係）新妻新八　柳下元吉　青木榮太郎　山崎庫太郎（弔詞係）主任　千葉彥治　佐藤作平　柏木哲（交通々信係）主任　山田磐麿　遠藤俊一郎　蓮沼龍輔

田中首相以下に送られ 悲しき列車東京を發つ

西園寺公代理外數百名が 上野驛ホームの光景

十二日午後三時本郷の邸を出でた翁の遺骸は町屋火葬場へと移され十三日午前九時近親者故舊等圍護され自動車數十臺を連ねて粛々として午前九時上野驛に着き遺骸は直ちに貴賓室に安置し稍經て貸切靈柩列車に移されたこれより先き上野驛には嗣子博之氏　令孫一郎氏外　菅波角之助　同夫人　近藤利兵衞　白井[illegible]郎　藤掛十一郎　竹內權兵衞　大森義一　草野欽一郎　草野磐　田子勝彌　藤夫妻　後藤忠弘　井上茂作　鷹崎貞衛の諸氏が見送りの千數百の弔客に應接し午前十時四十八分諸氏に護られた靈柩車は靜かに上野驛を發し途中各驛の送迎を受けて無事午後四時五十五分平驛に着いたが上野驛への見送人數百名の內重なる人々は

西園寺公爵代理　田中首相　高橋是清代理　淺野總一郎　川崎八右衛門　秦豐助　吉野周太郎　星一　齋藤珪次　堀切善兵衛　土岐子爵　山崎龜吉　關直彥　井坂孝　竹內陸軍政務次官　町田德之助　南大曹　松本孫右衞門　大倉發身　一宮正金副頭取　小原達明　濱田四郎　橋本節齋　梅浦健吉　榊田清兵衛　其他數百名

白井氏の死に對して

子爵 清浦奎吾子談

私が白井氏を知つたのは餘程古い事で、確か明治二十二年ごろと記憶します、何でも白井氏が國の郡長であつて、町村制實施に關して大意見を齎らして、時の內務大臣の山縣さんに、陳情に參られたが應接した秘書官の中山寬六郎が翁の强硬な意見を持て餘し、自分が其當時警保局の書記官であつた關係で、逢つた事を思ひ出しましたが溫厚な所に、强烈な、風格を宿し、其初一念を貫く點に於て一步をも枉げざる態度がある殊に政機を見るに敏であつて、現に寺內々閣樹立直後、原君の腰越の別莊に、私を引つ張り出して、其提携を獻策した、寺內さんと原さんの間に、政策上多少杆格する點もあつたが、氏が縱橫の才辯によりて、其實現を見るに至りたる如き顯著なる、事實として、惜見します、茲に白井氏の訃を聞き一言いたします。

井上平組頭 委員長任命

近く上京調査

平消防組頭井上茂作氏は去る十一日青山會館に開かれた大日本消防協會理事幹會に出席の上白井家の葬儀で歸平したが井上氏は同會席上火災保險率及超過保險に關する調査委員長に任命された　白井家葬儀すみ次第直ちに出京種々調査の筈

弔電（東京）

（順序不同）小林富吉　橋本萬右工門　同鐵吉　磐城六郎　藤掛與左工門　水野虎三郎　千葉彥治　安島重三郎　遠藤俊一郎　白井タキ　國井義　市原卯太郎　大高準太郎　山崎與三郎　福島縣農工銀行行員一同　草野晴治郎　吉田宗雄　磐城銀行々員一同　國井民造　木田織江　竹內信太郎　加藤不松崎松治　諸橋久太郎　本田文雄　河西八十治　靑沼鋒太郎　橋本銀行　伊藤儀七　同伊八　近藤商店　大坂支店　鷲清昇　鈴木榮　加澤忠治　鈴木明知　坂本　近藤七郎　同ヤス子（パリー）　倉田龜吉　磐城炭礦坑務所　山崎吉平　大塚勝太郎　加納五郎　馬場赤十字社福島主事　齋藤儀太郎　湯川廣吉　樋口喜八　河原喜久多郎　岡野淸佐瀨剛　阿部文吉　比佐昌平　岩代大森　物江浩　四家文吉　跡見女學校　野崎滿藏　栗原欣次郎　白井清作　柏原幸次郎　鈴木本彌　伊藤卯三郎　馬場日本勸業銀行總裁　小野伊佐治　勝野耕二　五十嵐哲治（以下三百四十通を略）

供物（東京）

△造花（順不同）田中義一　高橋是清　川崎八右工門　淺野總一郎　川崎肇　淺野義夫　近藤七郎　中澤彥雄　鈴木章之　杉田武雄　守安瀧造　宮田光雄　土岐章　菅波角之助　藤掛十一郎　平澤金兵衛　城十郎　草野欽一郎　菅波龜吉　星一　四條七十郎　下坂藤太郎　後藤忠弘　高橋寅太　近藤利衛商店　中央新聞社　高橋熊三　御園生喜三郎　伊藤秀之助　川崎友之介　齋藤儀一　福島縣農工銀行　木本宏房　戸田曠　明渡家　杉田啓一郎　杉浦甲子郎　遠藤隼見　大森鎭平　文化工業株式會社　森田錠太郎　濱田四郎　△燭臺一對石川貞義　△盛菓子近藤利兵藏　中澤彥雄　松本孫右工門　淺野總一郎　町田德之助　內田政夫

以下　百十名略

葬儀委員（東京）

（葬儀委員長）安島重三郎　（副委員長）中野浩忠　（東京方面委員長）草野磐　田子勝彌　四條七十郎　栗原一郎　山崎喜登一　齋藤義一　須藤忠彌（庶務係）前島榮次郎　山野邊義智（會計）諸橋心一　田中鋼造　堀川義正　清水時松　增田一五郎（應接係）遠山政吉　島田重穗　齋藤信治　福聚茂三郎　吉田民一郎　石井秀吉　藤原熊介　里見四郎吉　和田平松　山野邊義智（糧食係）小野一四郎（車馬鐵道係）森田錠三郎（火葬場係）堀內義正　遠山正吉　里見四郎吉　以上

平町の控邸に 弔電の山

各大臣其の他

三日午後まで平町紺屋町白井家に到着した弔電は山を作してゐるが（順不同）

田中總理大臣　鈴木內務大臣　三土大藏大臣　水野文部大臣　小川鐵道大臣　中橋商工大臣　望月遞信大臣　山本農林大臣　秦政友會幹事長　高橋前總理大臣　犬養前遞信大臣　堀切代議士　力石秋田縣知事　伊東福島縣知事　八田代議士　鈴木周二郎　藤井切二　湯邊平助　渡邊新　近藤卯太郎　根本貞二　加藤逸二　小松幹夫　武井正佐　藤久俊　高木友技　樫村慶田　倉孝雄　中日武卯

（以下二百七十四名略）

從五位勳四等白井遠平永々病氣の處本月九日午後四時死去致候に付此段謹告仕候

追而葬儀は平町字南町新道に齋場を設け十五日午前十時より午後一時迄相營み可申候

本廣告ヲ以テ御通知ニ代ヘ申候

昭和二年十月十日

嗣子　白井博之

親戚總代　白井菊造

友人總代

男爵　田中義一

高橋是清

川崎八右衛門

小林富吉

安島重三郎

山崎與三郎

諸橋久太郎

外科專門

入院隨意（自炊の便あり）

平　南町

上田外科醫院

電話一二九

釀造元

福島縣平町

山崎合名會社

電話（營業部一〇番　釀造工場二七番）

振替東京一九七五五番

上野車坂町四三

東京支店

電話（下谷五七二二番）

振替東京六八三三三番

內科
小兒科
皮膚科
花柳科

平町舊城跡（城山）

青沼醫院

醫學士　青沼淡夫

電話四〇三番

今は亡き白井遠平翁
中秋冷涼の故山に歸る
知名の士數百に迎えられ
平驛より一路紺屋町へ

十三日午後四時四十五分、今は亡き故遠平翁の靈柩を乘せた悲しき列車は滑るが如く平驛下りホームに着いた、最前頭部に連結せる特別貸切車の最中央に內閣總理大臣田中義一男、前總理大臣高橋是淸氏を始め故翁生前の知友朝野の諸名士より贈られた花輪に圍まれて安置された遺骨は大森義一氏の手に捧持され嗣子白井勝之氏、令孫一郞氏を始め同車せる

親戚緣者 知友諸名士護られて懷かしき鄉土、然も自らが半生の心血を注ぎ今日あらしめた感慨いと深き故鄉に歸りましたのである、肅として聲なく、沈痛漂ふ出迎人數百の群中を縫ふて驛前大廣場に着し自動車十數臺を連らねて田町大通から本町二町目に出で一町目を經紺屋町の自邸に着し直ちに同邸奥座敷に安置された、此の日朝來からの小雨は午後に至り篠つくばかりの激雨に變んじたが

天も此の 偉人の死を痛惜してか、遺骨が平驛着三十分前からカラリと止み上り、我が鄉土の生んだ誇るべき大偉人の遺骨を迎ふるに相應しき天候となつた

り、此れより先き故翁の偉大なる德を慕ひ玉の如き人格に、畏敬してゐた地方の名士有志は續々と平驛に翁の遺骨を迎えんとして、參集し白井家は特に驛前に出迎人の受付所を設置したが出迎入場者實に六百數十名に達し平驛

開設以來 の入場者最高記錄を作つたが、更らに故翁が畢生の大努力を傾注した結果今日の隆盛を見るに至つた、平町有志は勿論翁の大功業の余澤を受くる地方各町村から草鞋履きの人々に至るまで、翁の生前を知ると知らざるを問はず此の偉人を鄉土に迎んとする熱誠から驛前廣場に

滿ち溢れ た群集は驛前から紺屋町の白井邸に至る街路に滿ち〳〵平町有史以來の大混雜を呈した

白井遠平翁を懷ふ

前農務省勅任技士 田子勝彌氏談

時は正確に覺ひて居ないが梅の花咲く頃であつた。私は十歳位の小兒で三阪の小學校に通ふ時であつた。學校の樣子が何時もと違ふて平常小學校に姿を見せぬ私の父や其他の村の有志家などが揃ふて學校に來て何んでも試驗の成績を發表するのであつた。その內に滿開の梅の木に駒をつないで來られた偉大な体格の立派な洋服を着た方が學校に入り校長さんよりも上席に着席し私の父を始め村の人々はその人の前に丁寧にあいさつするのであつた。

夫れ は郡長さんでその人こそ白井翁であつたのだ。明治二十五年頃に私は開成山の中學校に入學したその時平の白井家から弘平さんといふ先輩が入學して居つた。弘平さんは白井家特有の氣象の持主で活潑で才氣に富んだ人で其の弘平さんと友人たりし關係から私は翁の知遇を得る樣になつたのである明治四十年頃

翁は 本鄉の東片町に住はれることになつた。この時には平町から全家族が移轉せられて中々賑かであつた。私もこの時から翁の家に寄寓して朝夕翁のくんとうを受くることが出來たこの頃の翁の生活は中々多忙であるのに翁はこの頃糖尿病をやんで居られて每日活動せらるゝ係らず米の御飯は食べず。フランスパンと少量のサツカリンを嘗めるのみであつた。翁は常に謹嚴そのもの〻樣なものであつて、無駄に一つ云はるゝのでなく。冗談一つ云はるゝでなく

取り 付く島のない樣であつたが心の中は慈愛に滿ちた人で私の樣な學生でも決して怖い人と思ふ念なく慈愛の深い親みのある人と思はれるのであつた。翁は極めて忍耐に強い人であつた。大抵の人ならば到底辛棒の出來ない糖尿病の手當として米飯を絕ち甘味を絕つて無味乾燥な食物で滿二ケ年も過ごされた翁は一生の間に巨萬の富を爲されたのであるが若い時は・

隨分 困られたこともあつた樣で翁自から云はれるのには翁が神田に居られた頃には僅かに二圓五十錢の家賃を拂ふにも困つたことがあるとの事である。或る年翁は逗子の養神亭に避寒せられた事があるその時私と時三さんは保養の爲めに養神亭に呼寄せられた。鎌倉と逗子との間の汽車賃は當時三等は金三錢で、二等五錢であつた私と時三さんは五錢を奮發して二等室に乘りまして逗子に下車すると翁は散步がてらに來たとてステーションに居られたが二等室から下車した。

私等 二人を見てソノ不心得を戒められその罰として翌日には葉山の堀內に移轉する時に私と時三さんは座布團を負せられたことがあつた。翁は少年の時から親に孝行な人であつた八十餘年の生活に一日として兩親を忘れたことがない樣であつた。會て翁の七十七歳の祝をした時に子孫を集めて懷舊談をせられた七十七の翁はその十五歳の少年時代の事を追懷せられ十五年の少年が小川から平町の三里の路で漢學の先生の下に通ふ時に夜の明けない中に家を出ると翁の父君は中途迄

提灯 を持つて見送られたその時の事を淚を垂れて話された事がある。八十二歳の期としてこの世を去らるゝ白井翁の腦裡には昔の兩親の膝下にあつた時の溫い夢を夢見て穩かに永眠せられたのであらう

白井遠平翁と私

三越呉服店專務取締役 濱田四郞氏談

私が中學校に居つた頃、上級生に白井弘平君が居つた快濶な青年であつたが、中學を卒業すると間もなく死んで仕舞つた。其後弘平君の令弟時三君を知る樣になつた。時三君が中澤時三君となり中澤彥吉君となつた共に實業にあつた爲め特に往復の機會を多からしめたが、彥吉君も昨春遂に死んで仕舞つた

私は 白井翁の血を肯けた兩君と友となつたが其二人とも失つて仕舞つた。白井翁を知つたのも弘平君彥吉君を友とした爲めである。特に彥吉君の時三時代に東片町の御宅へ伺ふ事が繁かつた爲めに翁の知遇を辱ふするに至つた。有體にいはば遠平翁と私との間には餘りに隔りがあつた。其も其昔だ友人のお父さんである。親しく御話しを申上くるといふよりも

時々 訓誨を拜聽する程度の間柄だ。世故に馴れた老人が諄々として世に處する途を說かるゝのを聽いて居ると自信が出來る安心が出來る。翁の話し、私の樣な粗野な一本調子の書生に與へてくれた處生訓、いつも眞面目に難有く聽いたものだ。親切なお父さんが樣子な氣がしてお邪魔をした事も屢々であつた。あの謹嚴なる調子で話さる態度は今でもよく記臆する。私は翁の前で一度も戲談をいつた試しもなく、一度も洒落をいつた試しがない、其程度の間柄だ。

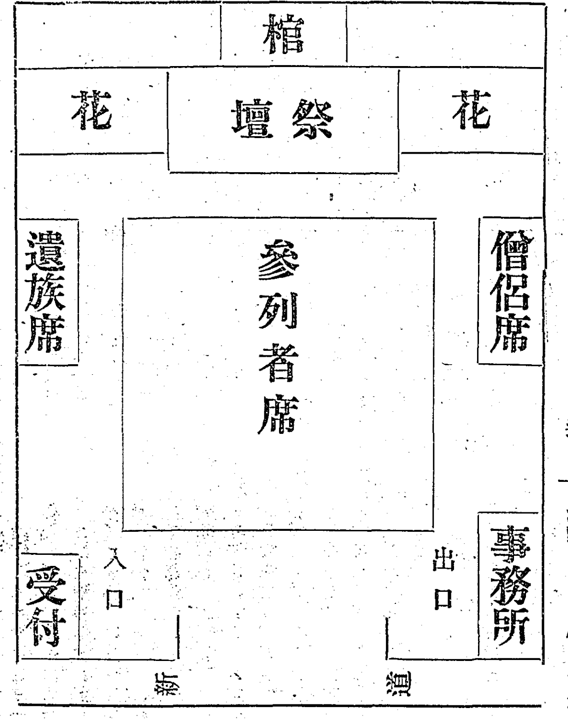
私が 高等商業を卒業して就職口を尋ねて居つた時、翁に賴込むと日本鐵道の久保扶桑さんに紹介して下された。久保さんの御宅へ伺つたり、久米良作さんの大磯の御宅へ伺つたりしたのも翁の御好意に負ふ處であつた。私が其の後大杉さんの世話で博文館に入りましたと翁の所に挨拶に行くと何處でも働くのは同じ事だ。しつかり心を込めて勸めなさい、立身出世は奮鬪努力に限る。眞面目に限るといはれた事があつたのを記臆する。私が三越の常務取締役に就任した直後に其店で偶然お目にがつた。本鄉から檜物町の川崎銀行まで步つて來た、運動がてらやつて來たが別段

疲れ なかつたといはれた。大震災少し前だ。其時「責任のある地位につかれた以上少しの弛みもあつてはいかぬ。勉強をしなさいよ」と五十歳の私にいつも變らぬ訓誨を與へられた噫此親切な翁も已に他界された。寂さも寂し、己に靈を送りて一言哀悼の辭に代へた次第であります

白井君を惜しむ

友人 榊田清兵衞氏談

丁度今を去る十二三年前、原さんが私一人を窃かにお呼びになつて、君福島の白井を知つて居るか、白井は德望もあり、勢力もあり、其上財力も相當にあるの外經綸の才に富んで居る君と相携ひ、參謀格となつて貰ひたいと云ふ話しであつた元來我輩は白井君の名は夙に聞く所あつたが、未だ親しく相見るの機會がなかつたので、原さんの紹介で白井君に會つた、年輩は我輩より兄分で、餘り口數も利かぬし、初對面であるから荷もせざる點もあるであらうが、原さんが此人を賞めちぎるは、何が取りところであるか合點が行かぬ節もある氣持ちでコツチでも下紐を解かずに、交りつゝある間に、聲息相通するとゆう風に、所謂要領を得ざる間に要領を得た譯だ、政友會で東北でも、相當に鬪士もあり、策士もあるが、白井君の樣な鬪士であつて、鬪士に見えず、策士であつて策士に見えず、一旦緩急あらば、捨身で行くたり古今獨步の概がありて、偕こそと原さんの推奬よ[illegible]づかれた。原さんの沒[illegible]政友會を二分し、我輩[illegible]儀なく、白井君とは[illegible]つ樣にあつたが、[illegible]亦相許す機もあるべ[illegible]せめてを待つてゐる[illegible]明處を異にし、天壽[illegible]し乍ら殘念の事共であ[illegible]白井君に關して、話すことも多くあるが、これで御免を蒙むりたい。



參百餘坪の齊場を設へ
會葬者四千名に達す
午前十時から後一時まで
終れば小川の墓所へ

平町南町裏の磐城銀行の所有埋立地に廣濶なる地を相した式場は幹線新道路に面し北面に高壇を設けて靈位を安置し其の前方兩側に導師小川村常慶寺兼務、宗務支所長赤井村盤田寺住職及赤井嶽住職旭純之師以下合計十一名の僧侶

喪主博之 氏以下遺族親戚並に一般會葬者は靈位に相對し三百餘坪の天幕內に着席すべく既に準備一切を了したが葬儀當日は午前九時紺屋町の白井家より式場に靈位を移し九時まで式場に於いて一般の悔を受け午後一時より式に入り崇嚴なる僧侶の讀經終つて弔辭弔電の朗讀次いで喪主博之氏令孫一郞氏初め遺族親戚參列の諸名士一般會葬者の燒香に移つて閉式し

靈位は直 ちに自動車を以つて小川村の自宅に移し約一時間同家に安置の上同村常慶寺に埋葬するが斯くて我が誇るべき鄉土の生んだ一大英傑白井遠平翁の魂魄は永遠に同寺に止り生前の如く我磐城の天地を護るであろう、因に會葬者は四千餘名に達する筈である

思ひ新らしく

安島重三郞氏談

元代議士故白井翁の遺された偉大なる業蹟は今更私共の喋々するまでもなく一度び危篤の報天聽に達するや翁が生前の功勞を思召され畏れ多くも特賜をもつて從五位に敘せられました。此の一事をもちましても故翁の

國家 鄉土に對する勳功如何に偉大であつたか分明致します私は翁の訃報に接して今更ら偉大な業蹟を振り返ると共に我が鄉土の生んだ誇るべき大偉人白井翁を永遠に失つた事を鄉土のみならず國家のために衷心痛惜に耐えぬものがあります。私が翁の知遇を得ましたのは政界に巢立つた廿七八才頃からで從後今日まで故翁の玉の如き人格に薰育されて參りましたが當時故翁は既に全ての

境逆 を切拔け順境に立たれてゐましたから彼の偉大なる大人格を作り上げるまでの苦闘と忍耐時代の翁は申し上げるまでもなく作り上げられた玉の如き大人格は私ばかりでなく一般の師表であると信じて疑ひません故翁が

心血 を注がれた常磐線鐵道、炭礦、小名濱港其の他凡ゆる大事業が完成し常磐線は東北の大幹線を形成し炭礦も我國第三位の出炭量を有し小名濱港も今や第二種重要港灣の指定を見るようとする機運に迴ひ翁はさぞ冠爾として瞑された學と考へます。

十三日到着の
供物
放鳥や花輪

平町白井家に十四日午前中まで到達した供物は次の如くである

△花輪 田中義一男 高橋是淸 東洋生命保險會社 磐城建物會社 平製氷會社 俠政會 明治造林會社 菅沼 市原 農工銀行 田村 實業銀行 河北新報平支局 磐城水產工業會社 永山德一 政友俱樂部 古河礦業 同杉本所長 出入職工一同 萩原小田社長 小林富吉 山崎與三郞 山田好之助 磐城銀行 同行員一同 日淸生命保險會社 平銀行 同重役一同 いはらき新聞社重役一同 大森鎭平 東部電力會社 竹內櫂兵工 日本電報通信社光永社長 平活版所 福島松葉館 栗原一郞 文化工業 佐富和田 神谷傳兵工 磐城海岸軌道 植田電氣會社々員一同 小名濱商業會社 高岡唯一郞 磐東銀行 やまと醬油 入山採炭會社 常磐每日新聞社 磐城炭礦 星野痛治 鈴木勝造 小名濱町 △放鳥 平消防組 磐城新聞社 △生花淺野義夫 （到着順）

白井さんがなくなりましたか

子爵 澁澤榮一翁談

同じ年輩の友垣として、相許した大隈さんと、松方さんは、とうに世を去られ。安田君は不慮の橫死と云ふことで、殘るは白井さんと大倉男と、淺野君の二人のみで、集る度每に話は何時も老ひの述懷に入るに及びます。此度白井さんの逝かれた事を考へると、我身のそれの如く今更らに驚きにたへませぬ。私の白井さんを知りましたのは殆んど四十年にもなりませうか、磐城に炭礦を起すべく之れにはアノ國で誰に相談をしたものか、といろ〳〵調査を試みました所、人望もあり才幹もあり、地位も縣會の常置委員と云ふ、地方最高の人であつた翁を得たならば、成功期して俟つべしと思ひ、お國のたしか、湯本の溫泉宿においでを願ひお逢ひしましたのが初めてでありますところが田舍人の土臭さ味がなく、淸洒たる風格で、話しも上手で之れに感心したことには、一から十まで、私の問ひし桁を外さず、餘計にも云はず、少なくも答ひず、響きの物に應する如く、理路整然として修辭の妙を極めた茲に於てか、寒村の僻地に此人あるかの歎を發せしめました、馬には乘つて見ろ、人には添つて見ろ、と云ふ俚諺がありますが、事を共にして見ると約束守るに忠にして、信義に淳く、後には炭礦の相談相手ばかりでなく、日本鐵道の常磐線開設に對しては、社長小野義貞氏に、白井さんを介して故川崎八右衞門さんと東西相應じて事に膺つて頂くことになりました、それから白井さんはお國の佐藤氏、苅宿氏とか、豬狩氏抔を連れてお出になり、政黨を超越して此鐵道の開通に向つて一路邁進せられ、期年ならずして常磐線の開通を見たのは皆白井さんの賜ものだと思ひます、此頃は久しくお目にかゝらず時々淺野君と逢ふ每にお噂さをいたして居る樣な譯で、此度訃を聞き私は感を深ふします

平町南町
大和田病院
電話一七〇番

平町田町通り
磐城病院
電話一一四番

平町田町
高久病院
電話五一三番

平町紺屋町
藤沼醫院
電話五〇七番

宮內省御用達
ヒゲタ醬油
釀造元 銚子醬油株式會社
平町田町
特約店 廣瀨支店
電話五四番

眞に不世出の材

私も近い親戚であると

淺野總一郎氏談

顧ると人の一生は短い樣で長いものだ、白井さんと私の交歡は磐城炭礦創立以來ですから殆んど四十年です其の間時々事業の事で喧嘩もしたり議論をした事が度々ありますが交際は益々深くなりました、今日では御子息の近藤利兵衛さんの**妹を私の**倅美夫の嫁に貰ひしたので、親類の關係まで出來た樣な次第に切つても切れない仲となつて仕舞ひました、何しろ明敏無類の頭腦を持つて居られ壯年政治に關係しては雷名天下を壓した程の偉大な力の人である事を立派に裏書きして居ります、白井さんにして若し薩摩、長州生れたら必らず總理大臣位やつておられたでせう。

思ひ出す白井さんとの話は殆んど肯き盡せない程多くあります、殊に忘れられない一事は磐城炭礦を澁澤子爵と私共等で起し故にお骨折り戴いてゐた頃の事、會社の創立間もなく白井さんは川崎八右工門さん等と入山炭礦を創立されました、其處で私は「貴下は磐城炭礦の經營當事者でありながら未だ完全な成功も見ない中に直ぐお隣に又炭礦を起さるる事は私共としては甚だ迷惑である、と共に會社に對し餘りに無責任ではないか」と詰問し大いに激論を戰せた事がありました、果ては大磯に當時保養して居られた澁澤子爵までが飛出されまあ〳〵と言ふ事になりました、所が白井さんは私の詰問に對して言はれるのには「私は決して營利のみが目的で炭礦を起したのではない勿論會社は利益も大切な目的ではありませうが私は其れ以上の大目的があります私に取りまして磐城は一番大切な郷土であり此の郷土の開發が何よりの目的であります故に私は入山炭礦はおろか磐城の天地に石炭のある限りは幾等でも其の開發に努力する覺悟でありますから私の此の立場を了解されて今後に於ても何分お許しを願ひたい」と男泣きに泣きながら申されました、私も其の時は白井さんのお話しに心から敬服致し議論は其の場限りで立消ゑとなりました、此一事をもつて見ても白井さんが郷土を愛する信念の如何に厚かつたかが肯けますと共に社會公共の爲には少くとも自己の利害など眼中になかつたであらう思ふに此の確固たる郷土愛の御信念があつたればこそ切角粒々辛苦の結晶たる常磐鐵道を無償で日本鐵道會社に讓渡する樣な擧も出來得た事でありませう、白井さんの樣な人は眞に當代得難き郷土愛の權化、大英傑である此の**大偉人を**生んだ磐城の人は眞に幸福であると申さなければなりません、私は磐城の者ではありませんが白井さんとの交際に依つて磐城を第二の故郷であると思つております、小名濱商港問題も著々實現の機運が近付いてゐる今日白井さんを失ふた事は何かと不便で御座います然しながら白井さんは實に家庭的に幸福に惠まれた人です私も子供の多い事では人後に落ちませんがとても白井さんには及ばない、**殊に白井**さんの御子息さん逹は各れも社會的に立派な地歩を占めて居られ全く後顧の憂がなく御一家が益々御繁榮である事は私共がせめてもの慰めです、私は此の懷しい友であり兄であり弟でもある白井さんの葬儀には是非磐城まで參り最後の握手をしやうと思つて居ります。

嗚呼白井遠平翁

郷土の生める此の偉人は

惜しくも遂に空し

磐城の傑物として將た郷土の誇りとしてその名一世に洽き白井遠平翁は去る九日午後四時八十二歲を一期として逝去された十五日盛大な葬儀を執行するに際し思ひ出するのは翁は德望高く才幹衆に郷し出ては政治家となり入りては實業家となり之くとして可ならざるは莫く人呼んで東北の西郷と稱するも亦宜なりと云ふべしだ、

若冠夙に國事に奔走され河野廣中氏と東西相分れて互に覇を稱し後官邊に身を投じ磐城の郡宰となり明治二十三年其職を拋ち第一期衆議院議員として濱通り一帶の選擧區より推されて其の選に當り衆望を一身に鍾めた、其當時西郷候、品川子等と國民混合の創設に鞅掌し渡邊洪基、曾禰荒助、佐々友房氏と共に同揮舍の四天王と稱せらる縱橫の經綸、と卓拔の眼識とを以て國政に參劃し、世の所謂名利の孤註ともならなかつた、當時海軍大臣樺山伯に對し、海軍大擴張を獻策し野黨囂々裡に自ら立つて雄辯を揮したる事は、一代、偉觀として人口に膾炙する處である。

磐城の天地に於て何物か天下に推擧すべきか是れ政治家の本領職責なりと茲に於て第一に推すべきものは磐城炭田の開發にありとして當時一世の實業家たる澁澤榮一氏及淺野總一郎氏等と共に磐城炭礦會社を創立するに努め第一段の奏功を見るや更に松方侯と謀り川崎八右衛門氏及び森岡昌純氏等と入山採炭會社を起して自らその社長となり以て磐城炭界躍騰の地歩を進めたるは人の倶膽する處である

今の所謂磐城の五大炭礦の一たる古河炭礦の前身たる好間炭礦は翁獨自の創設に係るもので當時の原政友會總裁が翁の實業家專門たるを惜み其の好間炭礦を自ら古河に介して年利に賣らしめ再び政界に擢んじ黨の長老として東北のたばねならしめたるの聲價は、人の知る處だ翁は原總裁の知遇に酬ゆべく老軀を拋して盡政壇上の人となり勳四等に敘せられた、晩年悠々自適閑雲野鶴を友とし二十幾人の子福者として松方侯と共に上流社會の双璧と稱せらる宿痾革まるや畏天聽に達し從五位に敘せられ名譽を家門に遺して溘然として永眠した朝野の名士幾千名その德を稱して相弔ふ

親に別れた心地

切めてに一言語りたい

川崎八右衛門氏談

白井さんと、私の家とは、先代からの相續で、口不調法な私でもレコードを破つてお話ししなければなりません、元來私は新聞社のお方に抔お話したことは、世界大戰の刻みに於て、財界の變遷に向つて職掌柄一度意見を述べたばかりで、あとは唯の一度もありません併し乍ら白井さんのことのお尋ねに際しては餘儀なき義務と存じます。白井さん

私の父との交歡は恐らく水戸鐵道會社々長としての父時代と記憶します其當時、白井さんはお國の郡長の職に在り、父は何時でも私に向つて白井さんを引合に出してアレ程の學識と手腕を以てして、猶且つ月給五十圓だ、况てお前も決して役人抔を希望するものでないと云ふことを屢々繰返し訓戒されたことを記臆して居ります、夫から白井さんは代議士となられ、御本人は得意の樣で居られましたが、私の父は其代議士と云ふものが大の嫌ひで是非罷めて頂きたいと

屢々苦言を提しました。然る處此間一ト足お先に御免を蒙むりたる飯村君が、又政治が御飯よりも好物と來て居るから之れはいけぬと、父を押へて千歲町の本宅で三人集まれば、其盛笑ひ話しで市が榮ゑると云ふ場面を幼少の頃ほい時々見聞した事柄であります。常磐線は始めは水戸を限界として水戸より北を趁ふて平を經て仙臺に至る線を開通するに努力した翁は其の後、代議士をおよしになつたので父は待つて居ました、とばかり早速白井さんを私の銀行の

最高顧問に聘し縱橫の經綸を振はせ支店を各別に配置し、大いに擴張を試みました。之れから、父は親戚の郷純藏氏今の郷誠之助男の父や松方侯にもお引合せをしまして澁澤さんや淺野さんの諒解を得て、お國の白水と云ふ處に入山採炭會社を起すことになり、元郵船會社長たりし森岡昌純さんと、舊幕人で相當小金を持つて居りました天野仙輔さんとを話合ひ

白井さんを社長として御苦勞を願ふ樣になりました、處が、翁は仕事一切御自分が切盛を爲し功を人に讓ると云ふ美徳を發揮して父を其社長に推しましてあたり、實に立派な人格であります。私は幼少より太閤記が好きで何でも秀吉と云ふ人は仕事は自らして功を主人に籍すと云ふ主義であつた想で、詰まり備中の高松征伐が其證據で、是れぞ秀吉公の外交哲學と思はれます。蓋し白井さんも此流を學びたるものでもありませうがそして白井さんが遂に社長になり縱橫の手腕を振はれて後私の近親なる郷誠之助に席を讓り、別に獨力で好間炭礦を起されたのであります。

雀百迄踊りを忘れずで白井さんも政治家の地位は段々向上し更に原敬さんの說に動かされて議政の府に入られたものと思はれます。好間炭礦も手放なされ、原さんの參謀格となりて、智慧伊豆の役目を司どり居られた樣です。私の家では銀行以外生命と火災の保險會社を遣りて成田火災保險は勿論凡ての關係會社の社長として宰領を願ひました。父は去死し私の代になりましても、矢張先代同樣に銀行の顧問となつて能く献策の功を積まれ重大なる問題ある毎に御意見を聞くと云ふことにいたして居ります。

所謂栗山大膳待遇で私は心よりして、師事して居ります左樣な次第でありますから此際白井さんのおなくなりになりまし事は親に別れた樣な心地がいたします。

靈位は午後一時に平から小川へ

自動車十一臺に分乘

途中行列を廢し

平町南町齋場に於ける葬儀は午前十時に始まり午後一時終了の豫定でそれより靈位は午後二時自動車に收め遺族近親者相次き小川村の自宅に至り同家に約一時間を安置し同家菩提所常慶寺の墓所に埋葬する筈であるが南町齋場より小川に至る自動車の番號分乘は左の如くである

△第一號自動車　靈位　白井博之　白井一郎　同夫人
△第二號自動車　大森鎮平　菅波角之助　同夫人　平澤喜代　白井五郎
△第三號自動車　近藤利兵衛　鈴木章之　同夫人　城十郎　藤掛丁一郎
△第四號自動車　遠藤準見　同夫人　白井クラ　白井十三郎　竹內權兵衛
△第五號自動車　松田武雄　同夫人　白井家族
△第六號自動車　白井家族
△第七號自動車　粟野家族
△第八號自動車　草野家族
△第九號自動車　大森家族
△第十號自動車　外親族
△第十一號自動車　委員長　副委員長　及委員

臨時會議を開き弔慰方法決議

けふ小名濱町會と

郡下町村長會で

故白井翁が畢生の努力を傾注した結果今日の如き隆盛を見るに至つた地方開發の大功業に酬ゆべく町村長會石城支會は十四日午前十時から舊石城郡會議室に臨時町村長會役員會を召集し伏見支會長以下役員全部出席の上故翁の大遺業に對する謝恩方途の協議を爲したが尚今や第二種重要港灣に指定されんとするの機運に到達してゐる小名濱港は其の昔故翁の努力が今日あらしめた事は人も知る如くで小名濱町は此れまた十四日午前十時から臨時町會を開催し町村長支會同樣謝恩方途の協議を爲した

郡制が存在したら白井翁は郡葬

支會役員會を終へて

伏見平町長語る

白井故翁の偉大なる功業を追慕する餘り十四日午前十時から舊郡會議事堂に町村長會石城支會の臨時役員會を召集し故翁に對する謝恩方途を協議して正午歸廳した石城支會長伏見町長を平町役場に訪ひ

感想を叩けば謙遜な面に悲痛の色をたたへながら「故翁の偉大な幾多の業蹟に就いては少くとも本郡に住み故翁畢生の大事業たる鐵道の開通、電信電話の促進、石城の寶庫たる炭田の開鑿小名濱港の開港等々の恩惠に浴してゐる人逹の間には知り盡される程知られてゐる事でもあり今更私共の喋々するまでもない事でありますが唯私共と致しては遺された幾多の

業蹟に對する微意を表したいとの考へから今日本郡町村長會の役員會を召集し列席された役員の方々に本郡初代の郡長として自治民政に範を垂れ一面郡のために全生命を捧げて努力された故翁の幾多の遺業に對しては當然謝恩の意を表すべきであると御計を致した結果役員諸君が萬場一致を以て贊成された遠い翁の靈前に謝恩の微意を表すべく決議しました、故翁が遺された偉大なる事業の恩惠を受ける

本郡住民の一人として私個人では既に郡制も廢されては居るものゝ若し郡制施行當時でありますれば當然、郡葬にも相當すべき性質のものでありますが郡葬と言ふ擧は前例もないでせうが故翁の如きは眞に不世出の大偉人でありますから當然郡葬を以つて故人の靈に謝恩すべきものでありませう」云々

社告

十五日は工場整理の爲め本紙夕刊を休刊し十六日は動力定時休止にて休刊いたします

磐城新聞社

講談　(162)

忠兵工の遺子

高橋掬太郎創作

布施半八郎揮毫

「姫君お手づから其のやうな事を遊ばされては勿体なうござりまする、どうぞお捨置き下さるやう願ひまする」

怪人は恐れ入つて云ふのであつた

「何の食事のことは女のつとめお心に掛けられまするな今日はどうやら水加減がよく炊けたやうで……ほ、ほゝゝ」

と千世姫はこぼれるやうに笑つた姫は山奥へ怪人に伴はれてから今日で四日になるのであつた。

「世が世であれば多くの侍女に傅かれ給ふて何の不自由のないお身が此のやうな人里遠く離れた山奥の石室の中に起臥遊ばされるさへにいたしく涙が流れまするのにまだその上に水仕の事など勿体ない限りでございまする」

怪人は痛はしげに云つた

「まあ、何を遠慮深う仰せられる人は境遇に從はねばならぬものでござりまする多くの侍女にかしづかれる時は其の時のこと山奥の石室にすむ時はまた其の時のことは妾の母君も昔は此のあたりの深山に陰れ住み給ふて水仕の業を遊されたとやらこれを思へば何も不思議がありませぬ」

と姫は却つて怪人の心を慰めるやうに云ふのであつた

姫は眞實は神部淸左工門の娘であらうとは姫も怪人も知る由がなかつた。で姫は深雪の方がその父立原新左工門と此の附近の深山に住んで居た事を思ふて我が身に比べて云ふのであつた

それにしても千世姫を成昌の質子と信じて忠實に仕へる此の怪人は何者であらうか、善か惡かは知らぬが石室の外に立つて隙間からひそかに覗き込んで居る怪人は中の怪人の面をしげ〳〵と見守り乍ら小首をかしげた

やがて表の怪人は何か思ひ當ることがあつたらしくあつと驚いた樣子であつた

しかし中の二人はそれとは知らない。姫は上座の熊の皮を敷いた上に坐り怪人は脇座の莚の上に胡座を組んで爐の火に顔を照され乍ら共に食事の箸を執つた

「城下では妾の行方について何事か噂して居りまするかア」

「は、種々の噂を致して居りまするがしかし一般の者は姫君を妙光寺から盜み出したのは昌康公や重太夫等の腹心の者とは知らず矢張り松並木で往來の武士を斬つて捨てる怪人であらうと申して居りまする」

「ではまだ七人の者の死体が發見されないのでありませうか」

「まだ見つからない樣子にござりまする何しろ大分密林の中でありまするからキコリか獵人でなくては見つかるまいと思はれまする」

「では定めし御身の詮議を嚴しく致して居りませう」

「左樣でござりまするなかなか詮議は嚴しい樣子でございまする殊に昌康公や早川重太夫は拙者が矢文を射込んだので七人の者の失敗を知り、拙者を狙つて居るやうでありますると」

「ではまだ御身が誰であるか判らぬのでありませう?」

「それは判るものでは有りませぬ昌康公を討たうとして斬死した石出忠兵工吉行に一子忠太郎のあつた事はその當時こそ一生懸命で探し廻つていたやうでありまするが今日の如く成長してゐるやうとは心づかず每夜現はれる怪人をなぞの人物として騷ぎ廻つてゐるやうでございますると」

怪人はカラカラと笑つた

石出忠兵工が妻の千代と共に姿をなくさせた一子忠太郎こそ疑問の怪人、天狗假面の正体なのであつた

忠太郎の言葉を聞いて石室の外の怪人は成程といふやうにうなづいた

外科　X光線科
赤心堂病院
外科、耳鼻咽喉科
內科、泌尿器科
平町字田町
電話四七五